Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-06-30

シェリング芸術哲学における構想力

八幡，さくら

(Degree)
博士（学術）
(Date of Degree)
2014-03-25
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲第6013号
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1006013

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

論　文　内　容　の　要　旨

論文題目

シェリング芸術哲学における構想力

氏　　名　：　八幡 さくら

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程文化構造専攻

指導教員氏名　（主）　松田毅　　教授
（副）　嘉指信雄　教授
（副）　長野順子　教授

（注）４，０００字程度（日本語による）。必ずページを付けること。

「構想力」(Einbildungskraft)とは、一般的には、何らかの像を心の中に思い浮かべる能力を意味する。近代において、カントがこの構想力を人間の認識に関わる心の能力であり、美の判断に関わる能力であると考えた。これに対して、ドイツ観念論の哲学者の一人である F・W・J・シェリング(1775-1854)は、構想力によって、神の創造性に類似した芸術家の創作能力を解明しようとした。シェリングは、1800 年から 1807 年にかけて、芸術哲学という芸術に関する哲学的な議論を著作や講義で発表している。その中でシェリングは、構想力に、没意識的なものと意識的なもの、自然と自由といった、対立する事物を綜合し、芸術において作品に美を現す役割を担わせる。シェリングにとって、自然と自由とは根源的には同一なるものであり、差異として現れた事物である。自然と自由を最終的に再び統合し、外的に美を現わす能力としての構想力は、芸術哲学のみならず、それ以前のシェリング自然哲学や同時期の同一哲学においても不可欠な役割を担っている。

ただし、これまでのシェリング芸術哲学の研究史において、構想力に関する研究は多いとは言えない。その理由として、シェリング哲学内部における芸術哲学の位置づけの問題が挙げられる。シェリングは自身の哲学的立場をしばしば変えるため、その立場の一貫性が常に問題視されてきた。芸術哲学は 1800～1807 年の一時期のみに論じられた哲学であり、その期間が同一哲学期と時期を同じくし、同一哲学的立場を取る。そして、それ以後シェリングが芸術に深く言及することはなかった。これらの理由から、シェリング哲学全体の発展から見れば、芸術哲学は一時的な解決に過ぎないとする見方が優勢であった(z.B., Schulz 1975)。しかし、その一方で、芸術に対する意識やその重要性を後期の神話論にも見出す研究もあり(Jähnig 1966 u. 1969)、芸術哲学に対する評価は定まっていない。ただし、このような先行研究とは異なった観点からシェリング芸術哲学を研究するものも登場している。その最たる例として、A・ツェルプストはシェリングの芸術論とりわけ造形芸術論が、シェリング自身の芸術作品の経験に基づいて構築された芸術理論である、ということを、実証的に解明している(Zerbst 2011)。

これまでのシェリング芸術哲学の構想力概念についての研究は、大きく三つに分けられる。まず、原像と写像の二世界論として理念と芸術作品の関係を把握し、芸術における構想力の弁証法的なプロセスを見出す研究がある(Barth 1991 u. Beierwaltes 2004)。次に、シェリングの構想力とファンタジーの区別をロマン主義の想像力概念との思想的連関において解明する研究が挙げられる(Engell 1981, Küster 1979 u. Frank 1989)。さらに、近年カント・フィヒテの構想力概念とシェリングの構想力概念との思想的影響関係を指摘し、自由と必然性を同時に実現する能力をシェリングの構想力概念に見出す研究が登場してきた(Loock 2007)。

これらの先行研究を踏まえ、筆者は、シェリングにおいて芸術に関する問題意識は前期から後期まで形を変えて継続されているという立場を取り、その鍵概念となるのが構想力であると考える。そして、

筆者は本論文において、シェリング芸術哲学を理論と作品分析の両面を備えた議論として呈示する。以上のことを示すために、芸術哲学の理論と作品分析の両面を支え、芸術創造に関わる構想力概念に着目する。議論の対象となる主たる著作は、シェリングの芸術哲学に関するものを中心に、自然哲学と同一哲学に関わる著作も参照する。本論文では、議論の方法として、以下の三つの柱を中心に据えて、シェリング芸術哲学の構想力概念について検討する。この三つの柱とは、1）カント哲学の構想力との比較、2）自然哲学との関係、3）芸術哲学の具体的側面の検討、である。

1）まず、シェリングの構想力概念の背景にあるカントの構想力を、シェリングがいかに受容し、展開させていったのかを検討することで、シェリングの構想力の独自性を明らかにする。具体的には、はじめに議論の土台として、シェリングに関わる構想力の概念史を概観する(第 I 部第 1 章)。そして、シェリングの『芸術の哲学』において示される、神の創造性と類似する芸術家の構想力について、バルトの議論を手掛かりにして、構想力の内部に多と一を繋ぐ二方向の動きを見出す(第 I 部第 2 章)。

続いて、カントの『判断力批判』の美感的判断と天才についての議論を、シェリング芸術哲学の美的直観と天才論と比較する(第 II 部第 1 章)。そして、構想力と関わる図式と象徴概念に着目して、カントの『純粋理性批判』の図式論と『判断力批判』の象徴論から、シェリングがいかにして図式・アレゴリー・象徴という三分法を展開するに至ったのかを検討する(第 II 部第 2 章)。このカントとシェリングの比較研究により、シェリングの構想力概念に、カントの構想力と類似する超越論的な機能と美を産み出す作用を見出すことができる。それとともに、両者の差異も明らかになる。カントが主観的な感情に基づく美感的判断力によって美が捉えられるとするのに対して、シェリングは美的直観という客観化された知的直観を働かせることによって、主観を越えた客観の側へと美を産み出す可能性を見出す。このことから、シェリング芸術哲学は、美の客観的実在性を認めうるという点において、カント美学の立場から明確に区別される。さらに、カント美学の受容的な議論とシェリング芸術哲学の制作的な議論を比較し、制作論に留まらないシェリング芸術哲学の議論の示し、制作と受容を同じ創造の両面性として捉えられるという解釈を示す。

2）筆者は、芸術において構想力が働く場合、その過程にはバルトが指摘するような弁証法的プロセスが見出されるが(第 I 部第 2 章)、それだけではなく、構想力には自然哲学由来の階層構造を示す類比概念たる「ポテンツ」概念が関わっていると主張する(第 III 部第 1 章)。このポテンツ概念は、『体系』において、主観から客観の側へと展開していく自己意識の歴史とともに働く。そのため、自己意識の歴史は、展層化していくポテンツ概念に基づく、構想力の展開過程として捉えられる。さらに、この構想力たる芸術の産出性の源には自然の産出性があるということを、『体系』から読み解く(第Ⅲ部第 2 章)。自然と芸術の関係性は、『芸術の哲学』を経て、『造形芸術の自然に対する関係について』で詳論される。

このようなシェリング自然哲学の力概念と関わる構想力概念こそが、芸術哲学において示される作品創造の根源にある、ということを明示する(第 III 部第 3 章)。自然という意識以前のもの、つまり没意識的な側からの呼びかけによって、芸術家は作品の創造へと向かい、完成された作品において、意識を越えた没意識的なものを再び付与する。自然を後に残して発展していった精神は、芸術において再びその自然へと回帰するのである。このように、芸術哲学は、自然と精神の連続性、自然の産出性といった、自然哲学の根本思想を、自身の哲学体系の中に取り込み、理論を展開していく。それゆえ、芸術哲学は自然哲学を内包しており、自然は芸術の内部でその創造能力を基礎づけ、生気づけるものとして働いているのだと結論することができる。

3）シェリング芸術哲学の具体的側面の検討は、芸術哲学が思弁的なものにとどまらず、その理論の応用可能性を作品分析において示すことへと繋がる。本稿では、特に 1798 年のドレスデン絵画館訪問を中心にシェリングの芸術経験を再構成する(第 IV 部第 1 章)。そして、その芸術経験およびポテンツ概念に従って形成された芸術ジャンル論と、各芸術ジャンルに対するシェリングの評価を検討し、その内部にある歴史性の問題を考察する(第 IV 部第 2 章)。そして、本論文の最後の部分では、造形芸術の一ジャンルである絵画に関する議論を取り上げ、シェリング芸術哲学の理論の作品分析への応用可能性を検討する。シェリングの造形芸術論において、芸術家と鑑賞者の構想力の活動に共通する創造性を認めうる、と筆者は考え、とくに近代に優位なジャンルとしてシェリングが挙げる絵画論に注目する。まずシェリングの絵画論から読み取れる構想力の働きとその本質を示し(第 IV 部第 3 章)、次にシェリングによる絵画作品の分析を再検討する(第 IV 部第 4 章)。最後に、これまであまり評価されてこなかった風景画論を取り上げ、そこで論じられる自然と芸術の関係を『芸術の哲学』と『造形芸術の自然に対する関係について』から読み解き、風景画の受容美学的側面を検討することで、芸術家と鑑賞者とに共通する構想力の創造活動について検討する(第 IV 部第 5 章)。このことは、第 II 部で指摘した、カント美学とシェリング芸術哲学との比較によって見出された、受容的側面と制作的側面の検討に対する、再考察の試みでもある。この議論を通して、鑑賞も二次的な創造過程であると筆者は主張し、創造的な構想力の働きを芸術家と鑑賞者の両方に認められるということを結論する。

以上の三つの観点に基づいて、本論文は、シェリング芸術哲学を理論と具体的な作品分析の両面から綜合的に議論することによって、従来のシェリング哲学研究に欠けていた観点を補完できる。それとともに、シェリング芸術哲学の構想力が、芸術家と鑑賞者の両方に共通する創造活動を担う働きである、と主張することにより、構想力概念に新たな役割を見出し、シェリング芸術哲学に対する新たな解釈の可能性を示す。

［ 課程博士用 ］

（ 別紙１ ）

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

氏　　名	八幡 さくら
論 文 題 目	シェリング芸術哲学における構想力

要　　旨

本論文は、「構想力」の観点から「ドイツ観念論」の代表的哲学者、シェリングの芸術哲学を包括的に論じた意欲作である。従来の研究では、シェリングの芸術哲学の営みは、幾度かの変遷を経る中で、1800～1807 年の限られた時期に限定される、という見方が有力であったが、本論文は、シェリング研究ではあまり焦点となってこなかった、構想力の概念に着目し、芸術哲学的な関心がシェリング哲学の一貫した内在的本質契機である点を、その自然哲学、「同一哲学」そして絵画論にまで踏み込み、浮き彫りにすることに成功している。この点は高く評価できる。

また、論文は、全体として哲学史的・概念史的な目配りが行き届いており、シェリング独自の「構想力」概念の位置をよく解明しているが、その反面、難解をもって知られ、時には「独断的」とも評される、「ドイツ観念論」特有の概念、たとえば絶対者としての「神」、「能産的自然」の概念などの十分に分析的な解明には至っていない、哲学的物足りなさがあることは否めない。また、ドイツ語原典の読みの正確さの向上の必要と、論文構成上、やや繰り返しが多い点などの叙述改善の余地がある。とはいえ、シェリングのドレスデン絵画館訪問に注目し、その芸術哲学的な意味を克明かつ具象的に考察する方法を採っている点も人文学としての哲学研究のひとつの可能性を示しているものとして評価できる。

本論文では、関連する研究史が以下のように整理される。「理念」と芸術作品の関係を「原像」と「写像」の二世界論として把握し、芸術の構想力に弁証法的過程を見出す立場、ロマン主義的想像力の影響作用史からシェリングによる構想力と「ファンタジー」の区別に着目する研究、先行するカントとフィヒテとの連関から、シェリングの構想力の概念に「自由と必然性を同時に実現する能力」を見出すものである。以上の諸論点を踏まえて、筆者は、[1]カントを軸とした「構想力」の概念史的研究からシェリングの構想力概念を位置づけ、[2]自然哲学の文脈の「力」ないし「ポテンツ」概念の観点から構想力を解明するとともに、[3]構想力の観点から見た絵画論の意義を検討する。このような見通しにより、論文は、全体として堅実な近世哲学史の研究となっていると言える。

本論文を貫く主張は以下の通りである。カントが代表するように、一般に、構想力は、像を表象する主観的認識能力であり、美感的判断力に関わるが、シェリングの場合、それは、神の創造に似た天才芸術家の創造力ないし自然の客観的な力である。シェリングの言う構想力は、対立する「無意識」と意識、自然と自由を綜合し、美を芸術作品として「個体化」する。この主張は、シェリングの「同一哲学」の表明に他ならない以上、その「真理性」がどのように確証され、擁護されるか、という課題が指摘されるが、カントとの対比は哲学史的には妥当であると言える。

第Ⅰ部では、構想力の概念史が示され、シェリングによるカントの超越論的「産出的構想力」の概念の受容が叙述される。「同一哲学」の立場で書かれた『芸術の哲学』に即して、芸術作品が産出される場合の「客観的な知的直観」としての「美的直観」の観点から神の構想力と芸術的構想力の類似が論じられる。筆者は、「一つの像を作る」構想力の作用の本質を「理念を形態に刻む統合」と「一へと形成する個体化」の働きに見て、それが、特殊な形式への方向と普遍的本質への方向の二方向で作用する点を強調する。原典の読みの精度と哲学的概念の説明には改善すべき点があり、作品創造における美的直観と構想力の関係の叙述などに曖昧さも感じられるが、これまで十分には解明されてこなかった、シェリングに固有の構想力概念の特色を浮き彫りにしている点は評価に値する。

第Ⅱ部では、カントの『判断力批判』における美感的判断および天才論との比較を通して、シェリングの『超越論的観念論の体系』、『芸術哲学』の美的直観の概念と天才論が特徴づけられる。また同時に、カントの『純粋理性批判』の図式論および『判断力批判』の象徴論から、シェリングの構想力の、図式・アレゴリー・象徴の形式の三分法への発展が跡づけられ、その意義が解明される。あくまで主観性の次元に定位するカントの美感的判断と対比するとき、シェリングの美的直観では知的直観としての客観化の働きが認められ、美の客観的実在性が積極的に承認される点が論じられるとともに、カントの美学が鑑賞的・受容的側面に限定されるのに対し、シェリングの芸術哲学が鑑賞と制作とを創造の二面として捉えているという解釈が提示される。構想力の諸形式に関しても、シェリングのアレゴリー論や象徴論の細部に注目したことは本論文の特徴の一つとなっている。カント美学の理解、カントの側から見た、シェリング批判の可能性の検討などの課題は残るが、論文は、シェリングの芸術哲学の伝統性と固有性を明らかにすることに貢献していると言える。

第Ⅲ部では、シェリングの自然哲学と芸術哲学との関連が、自然哲学の「ポテンツ」の概念と芸術哲学の構想力概念の類比から示され、芸術の産出性の根源として自然の産出性が解明される。この主張は、芸術的構想力に「弁証法」を見る解釈に対して、『超越論的観念論の体系』の「展層化」、つまり階層的に構造化する「ポテンツ」が、物質的過程を端緒に、主観から客観に展開する「自己意識の歴史」が「構想力の歴史」と言い換えられる点に基づいて、論証される。この歴史は、『造形芸術の自然に対する関係について』を手掛かりに、芸術家が自然の呼びかけに応え、創作に向かい、作品に没意識的なものを再付与すること、つまり、自然から発展した精神が芸術により自然に回帰することとして性格づけられる。この意味で、シェリングの芸術哲学は、自然と精神の連続性、自然の産出性を根本思想とする、自然哲学を内包しながら、「自然が芸術の内部で創造力を基礎づけ、生気づける」と結論される。シェリングの自然哲学自体の研究、特にその哲学史的位置づけを明確にするべき点などの課題はあるが、シェリング研究の文脈に即して自然と芸術の関係を問い詰めた考察は評価される。

第Ⅳ部では、シェリングの芸術哲学の作品分析の諸相が論じられる。これは、シェリングの造形芸術論が作品の経験に基づく理論であるという近年の研究成果を積極的に継承し、発展させた興味深い研究成果である。特に 1798 年のドレスデン絵画館訪問からシェリングの経験をたどり、ポテンツ概念に準拠するジャンル論と各ジャンルの評価が検討され、芸術の歴史性の問題が絵画論から論じられる。この検討を通じて、シェリングの絵画論では芸術家と鑑賞者双方の構想力に共通して創造性が認められうる点が主張されると同時に、この点が従来のシェリング研究で評価されてこなかった風景画論に即して実証される。ラファエロとレーニに対するシェリングの哲学的解釈と評価に関する本論文の主張は、再検討が求められること、風景画の受容美学的側面から見るとき、鑑賞が「二次的な創造過程」である、という論点もより立ち入った基礎づけを必要とするなどの課題が指摘されるが、芸術作品の「開かれた解釈可能性」のような解釈学にも相通じる視点などは興味深い。なによりも、一般に思弁的・形而上学的な印象の強いシェリングの哲学の背景にある豊かな経験的地平を明示することで、シェリング哲学の研究に関するひとつの新しい可能性と方向性を示唆していると言える。

本審査委員会は、以上のことから全員一致で、論文提出者、八幡さくら　が博士（学術）の学位を授与されるに足る資格を有するものと判定した。

審査委員

区 分	職 名	氏　　名	区 分	職 名	氏　　名
主 査	教授	松田　毅	副 査	東京大学教授	小田部 胤久
副 査	教授	嘉指 信雄	副 査	准教授	茶谷 直人
副 査	教授	長野　順子			

主査記載氏名・印	松田　毅